

水笠遺跡第26・27・28・29次発掘調査報告書

—新長田駅北地区震災復興土地区画整理事業にかかる

水笠通公園築造工事に伴う発掘調査報告書—

2009年3月

神戸市教育委員会

水笠遺跡第26・27・28・29次発掘調査報告書

—新長田駅北地区震災復興土地区画整理事業にかかる
水笠通公園築造工事に伴う発掘調査報告書—

2009年3月

神戸市教育委員会



1. 第26次調査地全景（東から）



2. 第26次調査SB08及び耕作痕検出状況（東から）

卷頭図版



3. 第29次調査区全景
(北上空から: 空撮)



4. 第29次調査区東半
(垂直写真)

序

本書は、兵庫県南部地震により大きな被害を受けた神戸市長田区、JR新長田駅北側での、震災復興地区画整理事業に伴い整備された「水笠通公園」築造に先立ち実施した発掘調査の成果について報告するものです。

調査では、今からおよそ1,450年前の古墳時代の集落の一部が発見されました。

今後、地域のコミュニティーの中心として、また防災拠点として、広く活用が期待されます公園の下に、地域の歴史を語る上で貴重な発見があったことをご記憶いただき、新たなまちづくりに活かしていただけましたら幸いです。

最後になりましたが、現地における発掘調査事業の円滑な推進、ならびに報告書刊行にご協力いただきました関係諸機関、各位に対し、厚く御礼申し上げます。

平成21年3月
神戸市教育委員会

例　　言

1. 本書は、神戸市長田区水笠通2丁目において、新長田駅北地区震災復興上地区画整理事業にかかる水笠通公園整造事業に伴い実施した水笠遺跡第26・27・28・29次発掘調査についての報告である。
2. 現地での調査は、平成15・17・18・19年度の計4回、神戸市教育委員会、財団法人神戸市体育協会が神戸市都市計画総局の依頼を受けて実施したものである。
3. 遺物整理、報告書作成作業は平成20年度に神戸市埋蔵文化財センターで実施した。本書の記述は、組織表に記した各調査担当者の原稿を基に藤井太郎が編集を行った。遺物実測及びトレースは東喜代秀と藤井が行い、遺構図のトレースは山口英正、東、藤井が行った。また、木質遺物の樹種同定と原稿の執筆は中村大介が行った。なお、平成15年度第26次調査、平成18年度第28次調査については、当該年度の『神戸市埋蔵文化財年報』に概要を報告している。本書は公園整造に伴う一連の調査で検出した古墳時代の遺構・遺物を中心にまとめたものであり、各次調査の詳細は『神戸市埋蔵文化財年報』を参照いただきたい。また遺構番号は断りのない限り各次調査のものを使用した。また、整理作業後に得た知見を加えており、内容が異なる部分は、本書の記述をもって正式とする。
4. 本書に掲載した位置図には、神戸市発行の10,000分の1地形図の「神戸市街地西部」、清水精夫編『明治前期・昭和前期神戸市都市地図』柏吉房1995に収録された25,000分の1假想地形図を使用した。
5. 本書で使用した方位は座標北で、その座標は日本測地系の平面直角座標系第V系である。標高は東京湾中等潮位(T.P.)で表示した。
6. 現地での遺構検出状況等の写真撮影は各調査担当者が行った。出土遺物の写真撮影は神戸市埋蔵文化財センターにおいて独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所牛飼茂氏の指導の下、杉本和樹(西大寺フォト)氏が撮影した。
7. 第29次調査地の航空写真撮影については株式会社GEOソリューションズに委託した。
8. 本書にかかる出土遺物及び図面・写真等の記録類は神戸市埋蔵文化財センターに保管している。
9. 現地での調査及び本書の作成にあたっては下記の方々にご協力いただきました。ここに記して深謝いたします。
神戸市都市計画総局 建設局西部建設事務所 山本雅和氏
10. 発掘調査及び報告書作成事業は神戸市文化財保護審議委員会による指導のもと、以下の組織で実施した。

神戸市文化財保護審議委員会 史跡・考古資料担当(平成15・17・18・19・20年度)

堀上重光 前神戸女子短期大学教授(～平成19年7月14日)

工楽普通 大阪府立狭山池博物館長

和田晴吾 立命館大学教授

教育委員会事務局	平成15年度	平成17年度	平成18年度	平成19年度	平成20年度
教育長	西川和雄	小川雄三	小川雄三	小川雄三	鷹口亮志
社会教育部長	高橋英比古	高橋英比古	大谷幸正	黒住章久	黒住章久
参考(文化財課長事務取扱)	森原泰輔	森原泰輔	柏木一季	柏木一季	柏木一季
社会教育部主幹(埋蔵文化財指導係長事務取扱)	渡辺伸行	渡辺伸行	丸山潔	丸山潔	丸山潔
社会教育部主幹(埋蔵文化財センター所長事務取扱)	宮本郁雄	丸山潔	渡辺伸行	渡辺伸行	渡辺伸行
埋蔵文化財調査係長	丹治康明	丹治康明	丹治康明	千種浩	千種浩
文化財課主査	曾本宏明	安田滋	安田滋	丹治康明	丹治康明
		山本雅和	山本雅和	安田滋	安田滋
内務担当学芸員	千種浩	内藤俊哉	前田佳久	山本雅和	山本雅和
		東喜代秀	阿部敬生	阿部敬生	阿部敬生
整理担当学芸員	西岡誠司	—	—	黒田恭正	黒田恭正
				佐伯二郎	佐伯二郎
保存科学担当学芸員	中村大介	中村大介	中村大介	中村大介	中村大介
財団法人 神戸市体育協会	平成15年度	平成17年度	平成18年度	平成19年度	平成20年度
会長	矢立邦男	京治川農	京治川農	齊孟宏	齊孟宏
副会長(専務理事事務取扱)	矢野栄一郎	矢野栄一郎	水田祐次	水田祐次	小川雄三
常務理事	野浪義作	野浪義作	磯弘四郎	磯弘四郎	磯弘四郎
秘書課長	横間勇男	横間勇男	横間勇男	赤沢惟	赤沢惟
事務係(主査(文化財課主査兼務))	曾本宏明	曾本宏明	—	—	—
紀念品調査(文化財課主査兼務)	—	—	山本雅和	山本雅和	—
事務担当学芸員	中谷正	—	—	—	—
調查担当学芸員	山口英正	黒田恭正	藤井太郎	東喜代秀	—
整理担当学芸員	—	—	—	—	藤井太郎

目次

序

例言

目次

I.	遺跡の概要と調査に至る経緯	1
1.	はじめに	1
2.	調査に至る経緯と経過	1
3.	水笠通公園整備に伴う発掘調査の実施	5
II.	発掘調査の成果 一古墳時代の集落	6
1.	調査地の基本履歴	6
2.	古墳時代の遺構と遺物	7
(1)	竪穴住居	9
(2)	掘立柱建物	12
(3)	土坑	17
(4)	溝（群）	18
(5)	出土遺物	18
3.	柱根の樹種について	22
III.	まとめ	24

報告書抄録

図版目次

第1図	調査地位置図	1
第2図	水笠遺跡と周辺の主な遺跡	2
第3図	事業地位置図及び水笠遺跡調査地位置図	4
第4図	基本土層柱状図	6
第5図	調査地 遺構全体平面図	7
第6図	調査地北東部 遺構平面図	8
第7図	SH01 平・断面図	9
第8図	SH02 平・断面図	10
第9図	SH03 平・断面図	11
第10図	SB01 平・断面図	12
第11図	SB02 平・断面図	13
第12図	SB03 平・断面図	14
第13図	SB04 平・断面図	14
第14図	SB05 平・断面図	15
第15図	SB06 平・断面図	16
第16図	SB07 平・断面図	16
第17図	SB08 平・断面図	17
第18図	SH01 出土遺物	18
第19図	SH02 出土遺物	19
第20図	SH03及びSH02・03周辺出土遺物	19
第21図	掘立柱建物出土の遺物	20
第22図	土坑・溝出土の遺物	20
第23図	遺物包含層・溝出土の遺物	21
第24図	水笠遺跡 全体平面図	25
第25図	明治時代の旧地形	26
第26図	SX208 平面図	写真図版 3

挿図写真目次

挿図写真 1	調査地遠景	目次裏
挿図写真 2	調査作業風景	目次裏

挿図写真 3	現地説明会風景	目次裏
挿図写真 4	SH01遺物出土状況	9
挿図写真 5	SB03検出状況（第28・29次）	14
挿図写真 6	SK01検出状況（第29次）	17
挿図写真 7	満群検出状況（第28次2区）	18
挿図写真 8	コウヤマキ輪断面	22
挿図写真 9	コウヤマキ放射断面	22
挿図写真 10	コウヤマキ接線断面	22
挿図写真 11	SB04全景及び柱模様検出状況	23

表目次

第1表	周辺の遺跡	3
第2表	水笠遺跡調査一覧表	5

写真図版目次

巻頭図版

1. 第26次調査地全景（東から）
2. 第26次調査SB08及び耕作直線出状況（東から）
3. 第29次調査区全景（北上空から：空撮）
4. 第29次調査区東半（垂直写真）

写真図版 1

1. 第26次調査区西半全景（北東から）
 2. 第26次調査区東半全景（南東から）
- 写真図版 2
1. 第28次1区全景（東から）
 2. 第28次1区西端全景（北北西から）
 3. 第28次3区全景（北東から）
 4. 第28次4区全景（西南西から）
 5. 第28次2区全景（南東から）
 6. 第28次2区東半遺構検出状況（東から）

写真図版 3

- 幕末～近・現代の町の様子を伝える遺構
- 写真図版 4
1. 第29次調査区全景（北東から）
 2. 第29次調査区北東部全景（東から）

写真図版 5

1. SH01全景（北西から）
2. SH02全景（西から）

写真図版 6

1. SH03全景（南から）
2. SB01検出状況及び作業風景（北から）

写真図版 7

SB02全景と柱穴断面

写真図版 8

SB08全景と柱穴遺物出土状況及び断面

写真図版 9

竪穴住居 SH01出土遺物

写真図版10

SH02・03、SB03・08、土坑、溝出土の遺物

写真図版11

溝、遺物包含層出土の遺物



挿図写真1 調査地遠景（南東上空から空撮）【平成11年3月撮影】矢印が調査地



○調査作業風景（挿図写真2）

—公園整備工事の進む中、調査を行う—

平成18・19年度の調査は、公園建設工事と並行して実施した。作業の工程やスペースの確保などを双方で調整し、円滑な作業の実施に努めた。



○現地説明会風景（挿図写真3）

平成19年度に実施した第29次調査では、古墳時代の住居址が多数発見された。平成19年11月10日（土）に現地説明会を開催し、調査現場を一般公開した。当日は地元の方々をはじめとする400名の参加があった。

I. 遺跡の概要と調査に至る経緯

1. はじめに

水笠遺跡は、現在の神戸市長田区水笠通2・3丁目街区の範囲、およそ東西200m、南北100mの拡がりをもつ集落遺跡である。六甲山南麓に細長く延びる海岸平野の西端近く、苅藻川と妙法寺川の間に形成された沖積地に立地する。新長田駅北地区震災復興上地区画整理事業に伴い、平成11（1999）年に発見された。

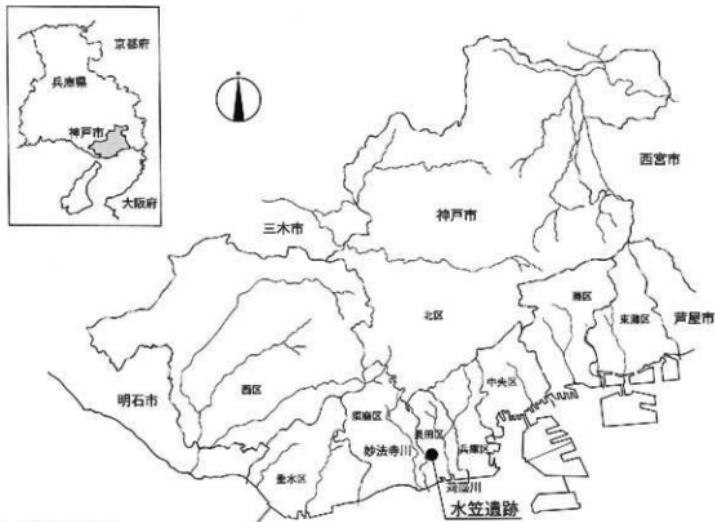
遺跡の位置するJR新長田駅北側一帯は、平成7年1月17日未明に発生した兵庫県南部地震により甚大な被害を受けた。倒壊、焼失により全半壊した家屋は地区内の約8割、1,780棟に上った。震災以前は、木造家屋など小規模な建物などが密集する地域であり、そのような状況下、今回の地震が一帯を襲った。

当地区は、神戸市総合基本計画に西部副都心と位置付けられ、震災からの復興は急務であった。平成7年3月より復興を目指したまちづくりが模索され、住宅と商工業用地が混在していたまちなみを機能分化し、快適な生活空間づくり、災害に強いまちづくりを目標に、平成8年7月、JR新長田駅北地区42.6haの範囲での区画整理にかかる事業計画が決定する。その後、平成9年3月には鷹取北エリアが追加され、JR鷹取工場移転に伴う跡地を新たな市街地用地として一体的に整備することを目的として事業が改められた。事業地面積は59.9haとなり、復興区画整理事業地区で最も広大な事業地面積をもつ地区となった。

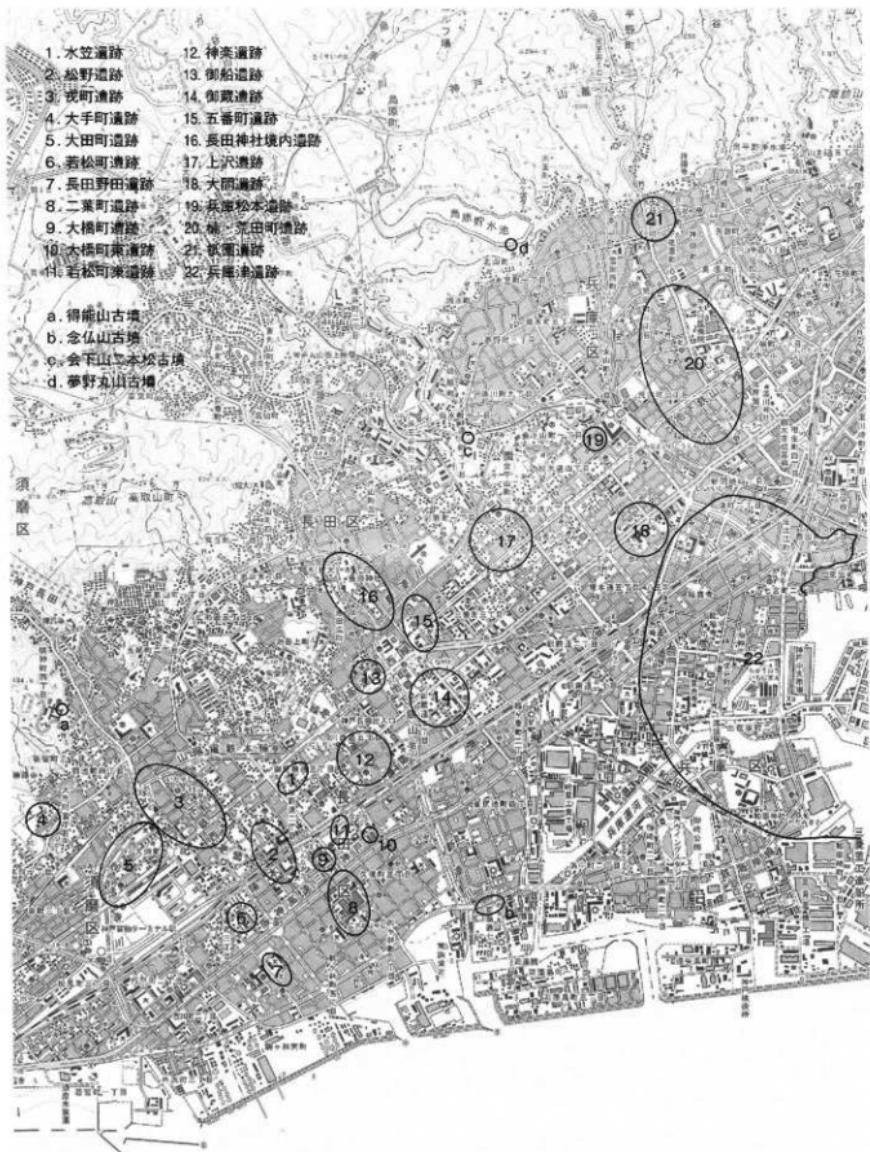
以降、着々と事業が進められ、今年度末には、地区的復興事業のシンボルとなる近隣（防災）公園「水笠通公園」が完成する。本書は水笠通公園建設に先立ち実施した発掘調査の成果について報告するものである。

2. 調査に至る経緯と経過

事業地区の周辺には、周知の遺跡である松野遺跡、神楽遺跡が隣接しており、神戸市教育委員会では、平成11年度に事業地内での埋蔵文化財の有無を確認するための試掘調査を実施した。調査の結果、松野遺跡、神楽遺跡の拡がりがそれぞれ確認され、両遺跡の中間にあたる水笠通2・3丁目街区において遺物、遺構が確認された。新たな遺跡の発見に伴い、この地区を「水笠遺跡」と命名し、周知化を図った。



第1図 調査地位置図



第2図 水笠遺跡と周辺の主な遺跡 (1:30,000)

新長田駅北地区内に立地し、試掘調査実施の端緒となった松野遺跡、神楽遺跡は、古墳時代の遺跡として神戸市内でも著名な遺跡である。両遺跡は古墳時代中期末頃に最盛期をむかえ、松野遺跡では、当地域の支配者層の居館址と考えられる構列で囲まれた建物群が発見され、神楽遺跡では、縄文土器と呼ばれる波来系氏族に間わる土器の出土が知られる。

刈藤川、妙法寺川両河川流域に分布する主な遺跡を中心に、遺跡の位置、概略を地図及び次頁の表に示す。

番号	遺跡名	時代	主な遺構・遺物
1	水笠遺跡	弥生時代中期～鎌倉時代	(弥生中期)溝、(古墳時代後期)竪穴住居・掘立柱建物・耕作痕
2	松野遺跡	弥生時代後期～鎌倉時代	(古墳中期～後期)墓園・竪穴住居・溝石祭祀・掘立柱建物
3	或町遺跡	弥生時代前期～室町時代	(弥生前期)水田・円形杭列・広葉未製品。(弥生中期)方形周溝墓
4	大手町遺跡	弥生時代中期～江戸時代	(弥生後期)竪穴住居・溝。(江戸時代)屋敷跡
5	大田町遺跡	古墳時代後期～平安時代	(古墳後期)竪穴住居・畠跡溝。(平安時代)掘立柱建物・規(鍛打文字)
6	若松町遺跡	弥生時代後期～鎌倉時代	(弥生後期)竪穴住居・畠跡溝。(平安時代)掘立柱建物
7	長田町遺跡	奈良時代～鎌倉時代	(奈良時代)掘立柱建物
8	二葉町遺跡	奈良時代～鎌倉時代	(鎌倉)掘立柱建物・井戸・船材転用井戸
9	大橋町遺跡	弥生時代～鎌倉時代	(古墳後期)溝、(平安～鎌倉)掘立柱建物・井戸・墓
10	大橋町東遺跡	古墳時代・中世	(古墳後期)竪穴住居
11	若松町東遺跡	奈良時代・中世	(奈良時代)耕作に伴う溝。(中世)掘立柱建物
12	神楽遺跡	弥生時代後期～平安時代	(古墳中～後期)竪穴住居・鍔式土器・(平安)掘立柱建物・施釉陶器
13	御船遺跡	弥生時代後期～鎌倉時代	(古墳後期)掘立柱建物・水田
14	御蔵遺跡	弥生時代後期～鎌倉時代	(弥生後期)掘立柱建物。(飛鳥～平安)掘立柱建物・墓
15	五番町遺跡	編文時代～鎌倉時代	(編文時代後期)舟形土器
16	長田神社境内遺跡	編文時代～江戸時代	(弥生後期)竪穴住居・小型彷彿鏡。(近世)神官屋敷跡
17	上沢遺跡	編文時代晚期～鎌倉時代	(古墳中～大型)溝築建物。(奈良・平安)掘立柱建物・井戸・銅棺
18	大開遺跡	編文時代晚期～鎌倉時代	(弥生前中期)溝渠集落。(中世)掘立柱建物
19	兵庫松本遺跡	編文時代～鎌倉時代	(弥生時代)竪穴住居・旧河道
20	楠・荒田町遺跡	弥生時代前期～鎌倉時代	(弥生前期)貯藏窓・(弥生中期)方形周溝墓
21	祇園遺跡	弥生時代後期～江戸時代	(平安末期)庭園遺構・東播系瓦・京系瓦
22	兵庫津遺跡	奈良時代～江戸時代	(中世)礎石建物。(江戸時代)町屋

第1表 周辺の遺跡

主要参考文献

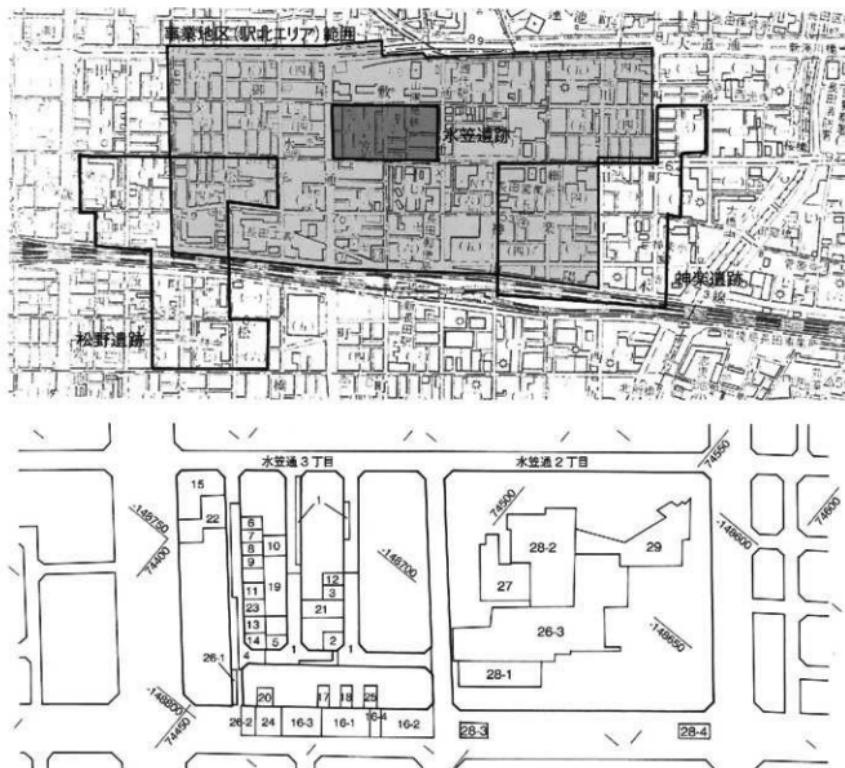
- 1 水笠遺跡 関野豊輔 2002「松野遺跡第11～23・25・26・29～31次 水笠遺跡第2・3・5～15・17～21次調査発掘調査報告書」神戸市教育委員会
- 2 松野遺跡 千種浩編 1983「松野遺跡発掘調査報告」神戸市教育委員会
- 3 或町遺跡 口野博史編 2001「松野遺跡発掘調査報告書 第3～7次調査」神戸市教育委員会
- 3 或町遺跡 山本雅和 1988「夜町遺跡第1次発掘調査概報」神戸市教育委員会
- 4 大手町遺跡 山口英正 1999「武町遺跡第15次調査」平成8年度神戸市埋蔵文化財調査年報」神戸市教育委員会
- 5 大手町遺跡 藤井太郎編 2003「或町遺跡第35・38・50・56次調査」松野遺跡第32・33・38次調査発掘調査報告書」神戸市教育委員会
- 6 若松町遺跡 中谷正編 2003「大手町遺跡 第1～4・6次発掘調査報告書」神戸市教育委員会
- 7 長田町遺跡 森内秀造・山川雅弘 1993「神戸市須磨区大田町遺跡発掘調査報告書」兵庫県教育委員会
- 8 二葉町遺跡 口野博史・川上亮志 1994「大田町遺跡第2次調査」平成3年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会
- 9 大橋町遺跡 山田清潮・高木芳史 2000「若松町遺跡」神戸市教育委員会
- 10 大橋町東遺跡 兼藤保明・小林幹二 1998「長田町遺跡第1次調査」平成7年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会
- 11 若松町東遺跡 川上厚志編 2001「二葉町遺跡第3・5・8・9・12次調査発掘調査報告書」神戸市教育委員会
- 12 神楽遺跡 東真代秀 2008「二葉町遺跡発掘調査報告書第14～21次調査」神戸市教育委員会
- 13 御船遺跡 藤井太郎編 2008「大橋町遺跡第2次調査発掘調査報告書」神戸市教育委員会
- 14 御蔵遺跡 中谷正 2008「大橋町遺跡 第1次～1～6次調査発掘調査報告書」神戸市教育委員会
- 15 五番町遺跡 平成20年度調査実施～宋公美
- 16 長田神社境内遺跡 香本宏明 1961「神楽遺跡発掘調査報告書」神戸市教育委員会
- 17 上沢遺跡 池田毅 2005「南船場遺跡第2次調査」平成9年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会
- 18 兵庫松本遺跡 安田滋編 2000「御蔵遺跡第1・4・14・32次調査報告書」神戸市教育委員会
- 19 大開遺跡 安田滋編 2001「御蔵遺跡第17・38次調査報告書」神戸市教育委員会
- 20 兵庫津遺跡 谷正俊編 2005「御蔵遺跡V 第26・37・45・51次調査」神戸市教育委員会
- 21 祇園遺跡 松林宏典 1997「五番町遺跡」平成6年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会
- 22 兵庫津遺跡 亂田恭正 1998「長田神社境内遺跡第17次発掘調査報告書」2008 年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会
- 23 兵庫津遺跡 口野博史・関野豊輔 2003「上沢遺跡第33次調査」「平成11年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会
- 24 兵庫津遺跡 谷正俊編 2005「上沢遺跡III」神戸市教育委員会
- 25 兵庫津遺跡 亂田恭久 1993「大開遺跡発掘調査報告書」神戸市教育委員会
- 26 兵庫津遺跡 中谷正編 2005「兵庫松本遺跡 第2～4・12・17・19次調査発掘調査報告書」神戸市教育委員会
- 27 兵庫津遺跡 丸山潔 1980「楠・荒田町遺跡」神戸市教育委員会
- 28 兵庫津遺跡 丸山潔 1990「楠・荒田町遺跡II」神戸市教育委員会
- 29 兵庫津遺跡 須藤宏 1997「御蔵遺跡第2次調査」平成6年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会
- 30 兵庫津遺跡 富山直人 2000「御蔵遺跡第5次発掘調査報告書」神戸市教育委員会
- 31 兵庫津遺跡 同田章一編 2002「兵庫津II」兵庫県教育委員会
- 32 兵庫津遺跡 内藤俊哉 2001「兵庫津遺跡第15次調査」「平成10年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会
- a～d 得能山古墳・念仏山古墳・会下山二本松古墳・夢野丸山古墳については、喜谷美里 1989「古墳時代 前方後円墳の成立と発展」『新修神戸市史 歴史編1』 神戸市 参照

試掘調査の実施後、水笠通3丁目街区において区画道路建設が予定されていたことから、すぐに影響範囲での調査を実施した。平成11（1999）年度から平成14（2002）年度の間に水笠通3丁目で、区画道路、都市計画道路、個人住宅に関する調査を計25回実施した。

この間の調査により、水笠遺跡の西側半分、水笠通3丁目街区での遺跡の実情が明らかになった。

遺跡は、現在の地表面から浅い部分にあり、中世以降の耕作や、現代の建物基礎などによる搅乱を受け、非常に残りが悪かった。遺物を含む層はほとんどの部分で削られ、出土遺物に乏しく、また検出遺構も詳細の不明なものが多かった。その中で内容の明らかとなった遺構は、弥生時代の溝、中世の柱穴、井戸である。また、調査地の南側は、比較的遺物包含層の残りはよいものの、遺物の出土量は少ない。このことからこの地では、遺構の分布状況は当初より希薄であった可能性が高く、検出遺構から想定される当地域の様相は、居住域ではなく、その縁辺部や耕作地などであったと考えられる。

この間の経緯や、平成11～13年度の個人住宅建設に伴う調査の成果については『松野遺跡第11～23・24・26・29～31次 水笠遺跡第2・3・5～15・17～21次発掘調査報告書』神戸市教育委員会2002及び、当該年度の神戸市教育委員会『神戸市埋蔵文化財年報』に詳しい。



第3図 事業地位置図及び水笠遺跡調査地位置図

調査次数	調査主体	調査地	事業内容	調査面積	調査期間	概 要	文献
●平成11(1999)年度							
1	神戸市体育協会	水笠通3丁目	区画道路	593m ²	1999.08.23～09.30	弥生時代中期溝 ピット	2
2	神戸市教育委員会	水笠通3丁目	個人住宅	53m ²	1999.11.26～12.02	弥生時代溝 石底丁	1
3	神戸市教育委員会	水笠通3丁目	個人住宅	356m ²	2000.01.17～01.19	ピット	1
●平成12(2000)年度							
4	神戸市体育協会	水笠通3丁目	区画道路	250m ²	2000.05.08～06.02	弥生時代溝 落ち込み ピット	3
5	神戸市教育委員会	水笠通3丁目	個人住宅	46m ²	2000.06.20～07.03	弥生時代溝 中世ピット列	1
6	神戸市教育委員会	水笠通3丁目	個人住宅	40m ²	2000.07.13～08.01	溝 ピット	1
7	神戸市教育委員会	水笠通3丁目	個人住宅	45m ²	2000.07.13～08.01	溝 落ち込み ピット	1
8	神戸市教育委員会	水笠通3丁目	個人住宅	45m ²	2000.08.17～08.04	弥生時代溝	1
9	神戸市教育委員会	水笠通3丁目	個人住宅	45m ²	2000.08.17～08.04	溝 土坑 ピット	1
10	神戸市教育委員会	水笠通3丁目	個人住宅	65m ²	2000.08.17～08.04	溝 落ち込み ピット	1
11	神戸市教育委員会	水笠通3丁目	個人住宅	25m ²	2000.08.07～08.11	溝	1
12	神戸市教育委員会	水笠通3丁目	個人住宅	35m ²	2000.09.06～09.19	遺構なし	1
13	神戸市教育委員会	水笠通3丁目	個人住宅	20m ²	2000.09.21～09.25	遺物包含層	1
14	神戸市教育委員会	水笠通3丁目	個人住宅	30m ²	2000.09.21～09.29	弥生時代溝 中世井戸・柱穴	1
15	神戸市教育委員会	水笠通3丁目	個人住宅	220m ²	2000.02.14～03.09	溝 土坑 ピット 施釉陶器 瓦片	1
●平成13(2001)年度							
16	神戸市体育協会	水笠通3丁目	都市計画道路	236m ² (675m ²)	2001.06.28～12.05	平安時代溝 鋼文時代堀渠～弥生時代前期流路	4
17	神戸市教育委員会	水笠通3丁目	個人住宅	50m ²	2001.07.23～08.01	ピット 鋼文時代堀渠～弥生時代前期流路	1
18	神戸市教育委員会	水笠通3丁目	個人住宅	52m ²	2001.08.02～08.09	ピット	1
19	神戸市教育委員会	水笠通3丁目	個人住宅	160m ²	2001.10.30～11.08	弥生時代溝 ピット	1
20	神戸市教育委員会	水笠通3丁目	個人住宅	35m ²	2001.11.08～11.12	ピット	1
21	神戸市教育委員会	水笠通3丁目	個人住宅	100m ²	2002.11.15～11.22	溝 ピット	1
●平成14(2002)年度							
22	神戸市教育委員会	水笠通3丁目	個人住宅	45m ²	2002.05.14～05.25	溝 ピット	5
23	神戸市教育委員会	水笠通3丁目	個人住宅	45m ²	2002.05.29～06.03	溝	—
24	神戸市体育協会	水笠通3丁目	都市計画道路	45m ²	2002.06.06～06.13	遺構なし	—
25	神戸市教育委員会	水笠通3丁目	個人住宅	65m ²	2002.06.18～06.24	溝	—
●平成15(2003)年度							
26	神戸市体育協会	水笠通2丁目	公園・区画道路	1,500m ²	2003.10.21～12.26	溝 ピット 古墳時代後期掘立柱建物 耕作痕	6*
●平成17(2005)年度							
27	神戸市体育協会	水笠通2丁目	公園	355m ²	2005.12.14～2006.01.16	溝 ピット	6
●平成18(2006)年度							
28	神戸市体育協会	水笠通2丁目	公園・都市計画道路	1,495m ²	2006.10.17～12.27	弥生時代溝 古墳時代後期掘立柱建物 耕作痕	6*
●平成19(2007)年度							
29	神戸市体育協会	水笠通2丁目	公園	700m ²	2007.10.03～11.22	古墳時代後期堅穴住居 捩立柱建物 溝 土坑	6

第2表 水笠通跡調査一覧表

*太線枠内が公園整備に伴う調査

**複数面積欄 調査面積の()は複数面積調査による延べ調査面積

***契約欄 研究契約のない面積は、出土遺物がないため詳細が不明なもの

****文書欄 公表・未公表・実績報告書による

文献1 「松野遺跡調査11～23・25・26・29～31次」水笠通跡第2・3・4・5・15・17～21次発掘調査報告書(神戸市教育委員会2002)

2 「水笠通跡第1・2回調査」平成11年度神戸市埋蔵文化財年報(神戸市教育委員会2002)

3 「水笠通跡第4・5回調査」平成12年度神戸市埋蔵文化財年報(神戸市教育委員会2003)

4 「水笠通跡第6・7回調査」平成13年度神戸市埋蔵文化財年報(神戸市教育委員会2004)

5 「水笠通跡第22次調査」平成14年度神戸市埋蔵文化財年報(神戸市教育委員会2005)

6 本書(※は当該年度「神戸市埋蔵文化財年報」に掲載)

3. 水笠通公園築造に伴う調査の実施

そのような状況下、平成15（2003）年度より、水笠通2丁目街区で調査が開始された。水笠通2丁目街区全域を用地とする「水笠通公園」の建設に先立つ発掘調査は、從前建物や仮設住宅の移転、除却作業の進捗状況に合わせ、調査が可能となった範囲から着手した。

●第26（-3）次調査 平成15（2003）年度実施

2丁目街区でははじめてとなる調査。街区中央の約1,500m²について調査。古墳時代後期の掘立柱建物1棟と耕作に伴う溝を検出した。

●第27次調査 平成17（2005）年度実施

第26次調査地の西側に位置する調査区。時期不明の土坑とピット、流路痕跡が確認された。

●第28次調査 平成18（2006）年度

第26・27次調査地に隣接する部分と、街区南側の都市計画道路細山線の拡幅部の計4箇所で調査を実施。古墳時代後期の掘立柱建物の一部と、耕作に伴う溝を検出した。

●第29次調査 平成19（2007）年度実施

第26・28次調査で建物が検出された部分の北側に位置する調査区。堅穴住居、掘立柱建物合わせて10棟が発見された。水笠通跡での古墳時代の集落の中心となる部分と考えられる。

II. 発掘調査の成果 一古墳時代の集落一

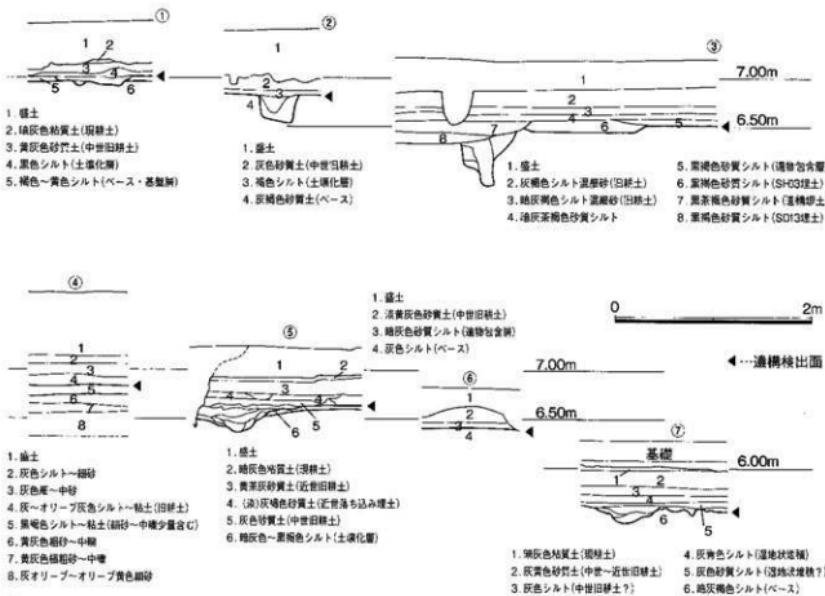
3丁目街区での調査において、主に弥生時代と中世の遺構、遺物が検出される中、2丁目街区では、古墳時代の建物群が検出され、今までに全く確認されていなかった同時期の集落の存在が明らかになった。建物が立地する範囲は、街区の中央付近から北側にかけての範囲に限られる。

1. 調査地の基本層序

調査地内には、震災あるいは戦災に伴う整地層の下に近世～近現代の耕土層、中世耕土層が堆積し、この下に0.05～0.2mの層厚で遺物を含む層が堆積する。古墳時代の建物が検出された調査地中央から北側にかけての範囲に黒褐色粘質土が堆積し、同時期の遺物を良好に包含する。その他の部分では、調査地北西側では遺物包含層は削平され、旧耕土直下で黄色シルトの遺構面となる。南西側は黒褐色シルト、暗灰色シルトから遺物が出土するが、その量は少なく、土壤化層に遺物が混じるものと考えられる。調査地南東側でも、暗褐色シルト、黒褐色シルトが堆積し、東に向かい層の厚みが増す。南西側に堆積する層と同様の色調を呈するが、土壤化層と考えるよりは、湿地状の堆積とみた方が妥当である。

遺構面を形成する層は、建物などが検出された範囲に暗褐色小礫混じり細砂が堆積しており、砂質が強い。その周辺では徐々に粘質の強い堆積となり、北西側では黄色シルト～褐色シルトの土壤化層上面が遺構面を形成する。南東側では黄色シルト～灰褐色シルトとなり、軟弱な地盤である。南東端の第28次調査4区では湧水が確認された。調査地の旧地形は、2丁目街区の右上と左下を結ぶ南北の対角線を境に北西側の地盤が最も高く、南、東にそれぞれドガリ地形を形成し、街区南東隅では1.0m近い地山面の高差が生じている。

建物はこの砂層の堆積する範囲にのみ分布しており、周囲よりも安定した地盤を形成した場所であったと想像される。特に微高地状の地形でなかったことは、削平を免れた遺物包含層の残存状況からも判断される。

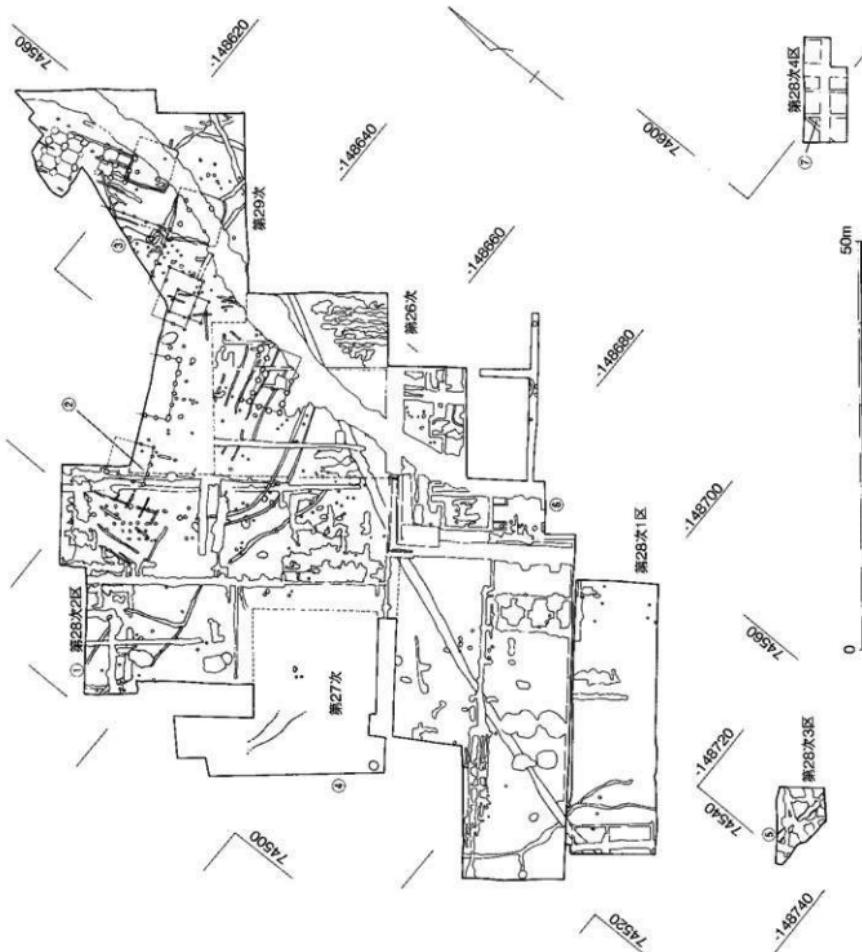


第4図 基本土層柱状図

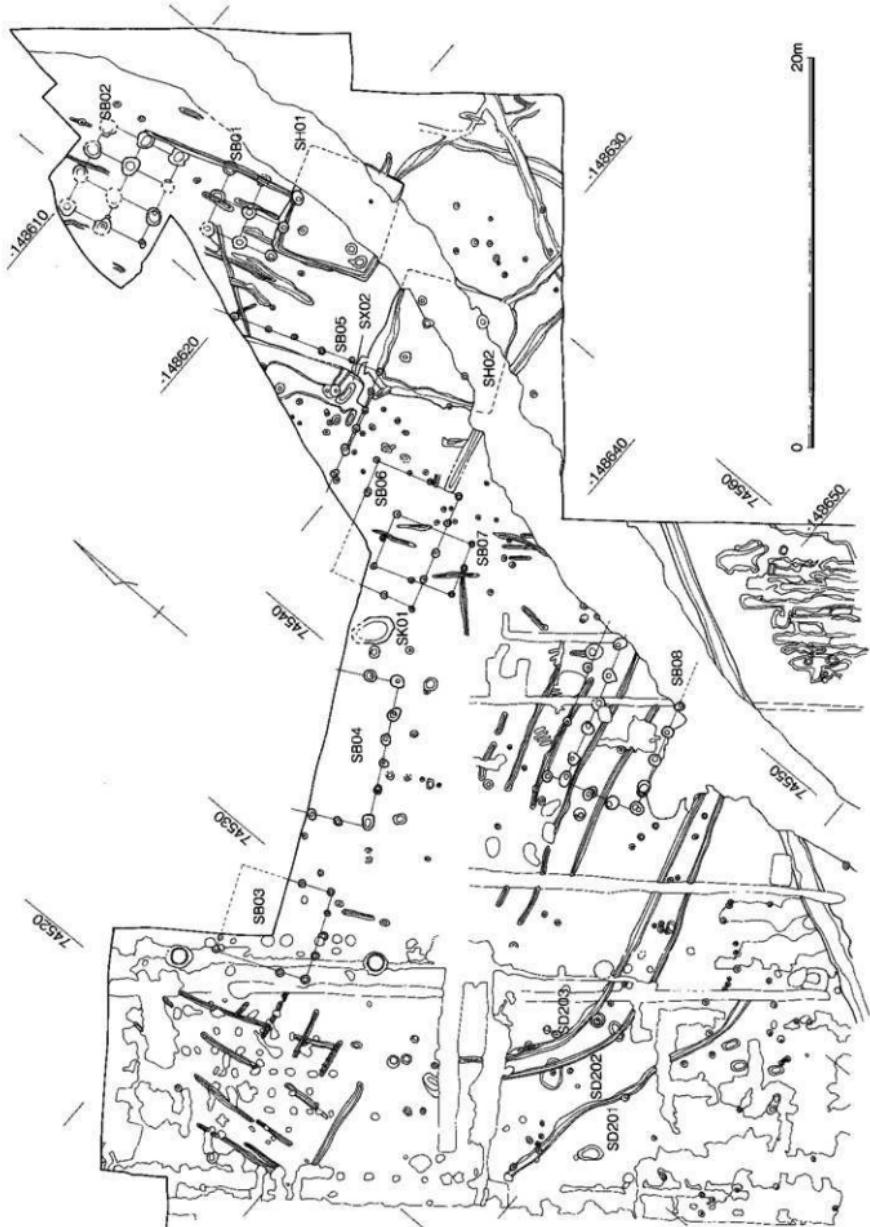
2. 古墳時代の遺構と遺物

第29次調査区の全城、第26次調査区の北東部、第28次調査区2区の一部で、建物などの遺構を検出し、水等遺跡における古墳時代の居住域を確認した。

ここでは堅穴住居3棟、掘立柱建物8棟、土坑3基、溝多数を検出した。



第5図 調査地 遺構全体平面図 ○数字は第4図の土層図の位置を示す



第6図 調査地北東部 造構平面図

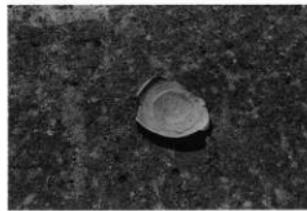
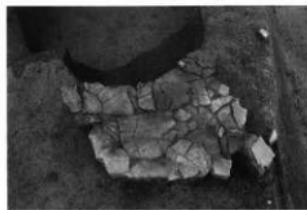
(1) 積穴住居

① SH01

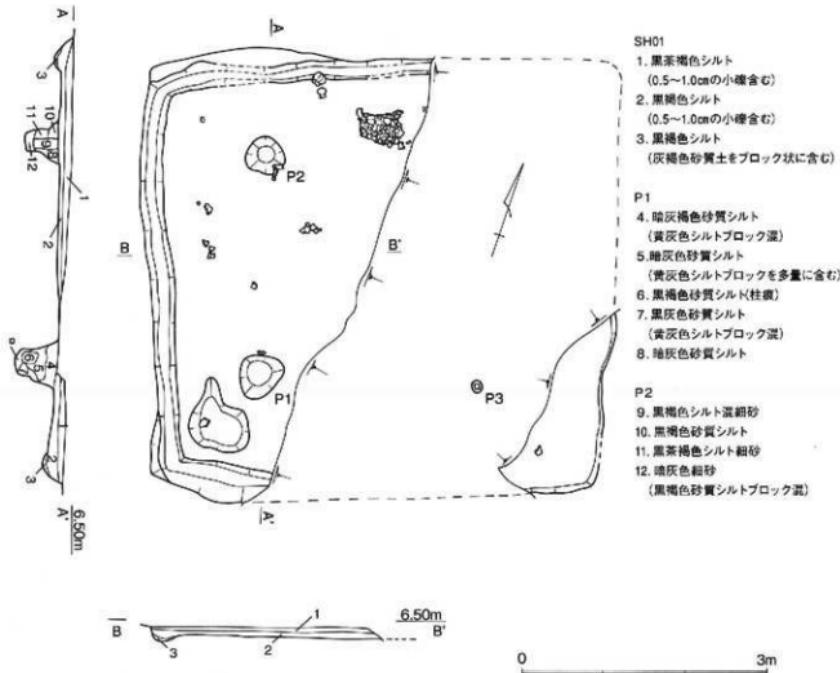
一辺約5.5mの方形の積穴住居で、検出面から床面までの深さは約0.2mである。近世～近代の流路の影響により、東半部が削られ、残存状況はあまり良好でない。カマドや炉は確認していない。主柱穴3基と周壁溝を検出した。主柱穴は平面円形で、3基中2基の柱穴の規模は直径約0.5m、深さ0.4～0.5m、P2に残る柱痕から、柱材の径は0.1～0.15mと推測される。

P3は擾乱により残りが悪く、径約0.1m、深さは0.03mで、柱穴掘形の底が遺存するのみである。周壁溝は幅0.2～0.3m、深さは0.1m程度で、南東部は明瞭でないが、本来は全周していたと考えられる。

遺物は、埋土中より須恵器の蓋杯、杯身、翫、土師器甕などが出土し、甕を除き、いずれも床面より若干浮いた状態である。建物が廃絶し、埋没する際のものと考えられる。



挿図写真4 SH01遺物出土状況

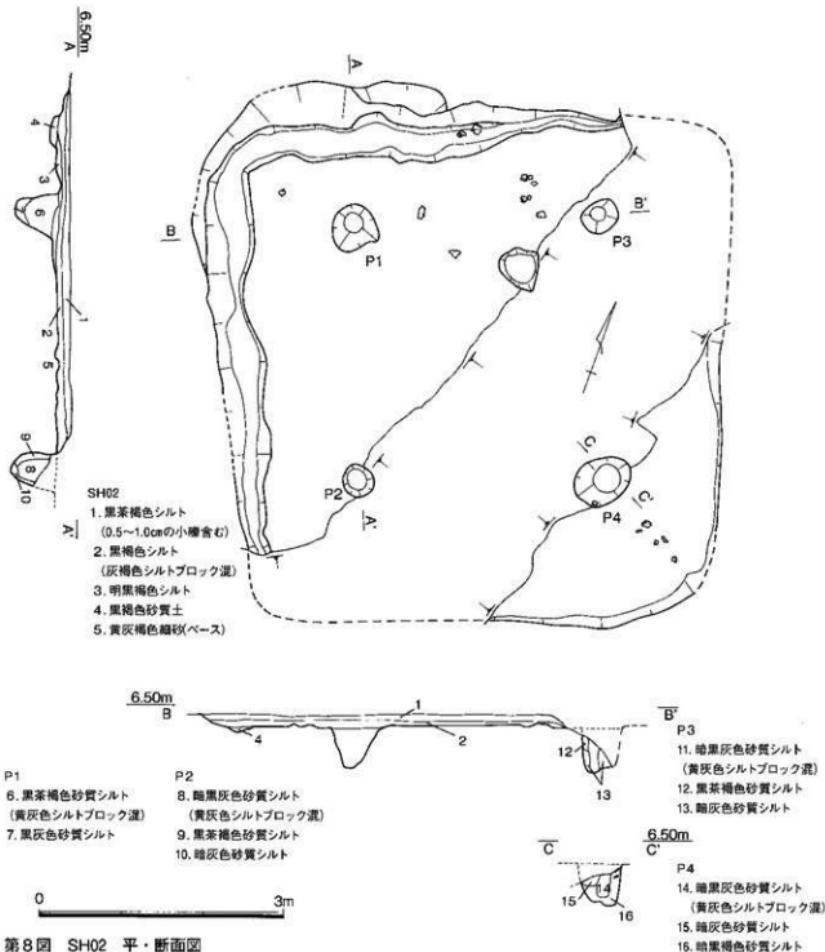


第7図 SH01 平・断面図

②SH02

一辺約6.0mの方形の整穴住居で、検出面から床面までの深さは0.15~0.2mである。SH01同様、中央部が近世~近代の流路により搅乱されている。主柱穴4基と周壁溝を検出した。カマドやがは検出しておらず、流路により削られた可能性がある。主柱穴は平面円形で、いずれも径約0.5~0.6m、深さ0.5~0.6mを測る。P3・4に残る柱の痕跡から、柱の径は0.15mほどと推測される。周壁溝は幅0.2~0.4m、深さ0.05~0.1m程度で、南東部は明瞭ではないが、本来は全周していたものと考えられる。

遺物は、須恵器の高杯や器台の脚と考えられる破片のほか、土師器の壠、高杯片が出土している。



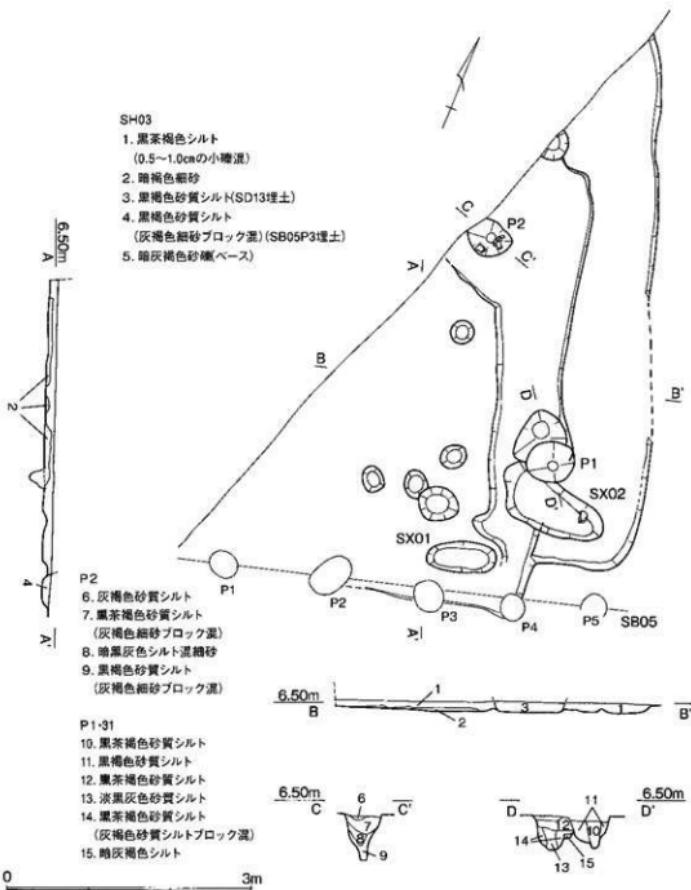
第8図 SH02 平・断面図

③SH03

東西5.2m以上、南北6.7m以上の方形の竪穴住居で、検出面から床面までの深さは約0.1mである。溝や掘立柱建物を構成する柱穴に切られるため、遺存状況は良くない。径0.45~0.5m、深さ0.4~0.6mを測る主柱穴2基を検出した。P1に柱の振跡がみられ、柱材の径は0.18mである。この建物では周壁溝は確認していない。カマドや炉は検出しておらず、調査区外にある可能性が残る。

遺物は、須恵器の杯身、壺蓋片のほかに土師器片が出土したが、いずれも小片である。

また建物の南東隅部、P1周辺では、掘立柱建物に伴う柱穴や、溝状遺構、土坑などがあり、遺構が錯綜している。土坑SX02から須恵器杯蓋が1点出土した。



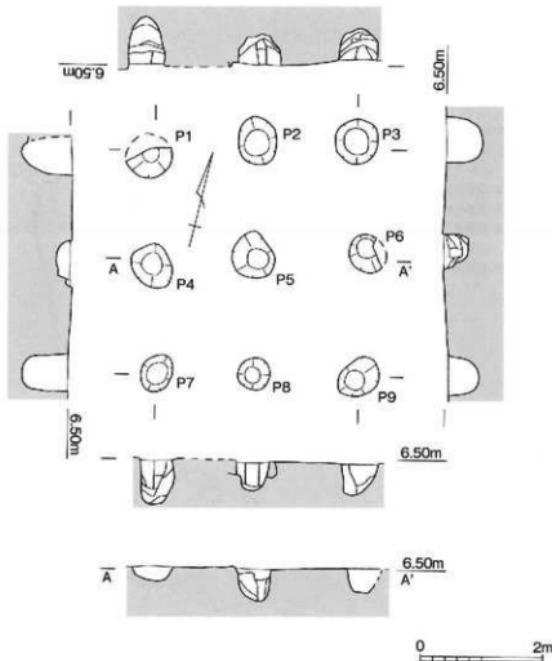
第9図 SH03 平・断面図

(2) 挖立柱建物

①SB01

SH01と切り合って検出した建物で、東西2間（約3.3m）、南北2間（約3.9m）の総柱の掘立柱建物である。柱穴の掘形は平面凹形で、直径0.5~0.7m、深さは0.25~0.8mである。柱の痕跡から推測される柱材の径は0.15~0.2mである。西側の柱列、P1とP7など、四隅の柱穴が深く掘られていることが断面の観察から分かる。

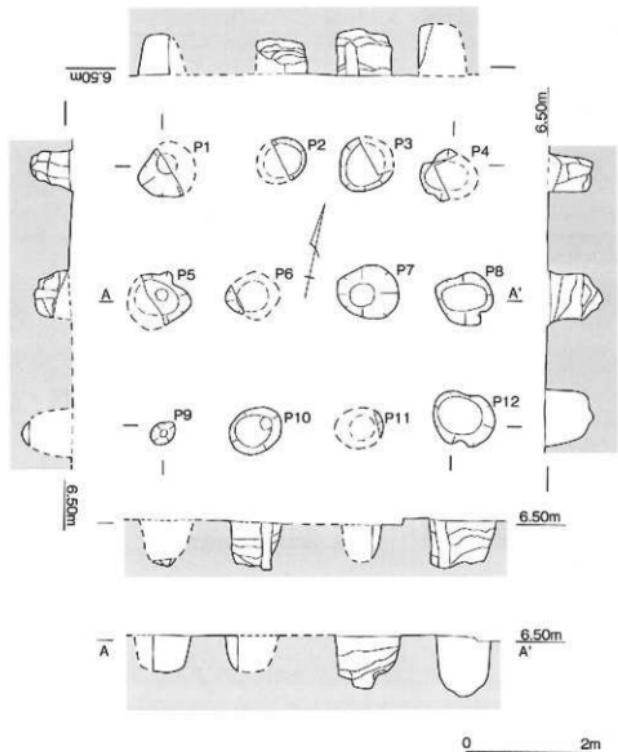
この建物は検出状況から、SH01が廃絶した後に建てられたことがわかるが、柱穴からは須恵器、土師器の極細片が出土したのみで、時期は明確でない。



第10図 SB01 平・断面図

②SB02

SB01の北側に建つ、東西3間（約4.8m）、南北2間（約4.3m）の総柱の掘立柱建物である。柱穴の掘形の平面形は不整円形で、直径0.7~1.0m、深さ0.6~0.9mである。柱の柱痕から復元される柱材の径は0.15~0.2mで、掘形の規模は大きいが、柱材は他の建物とあまり差はない。柱穴からほとんど遺物が出土していないため明確な時期は不明である。建物の主軸が掘立柱建物SB01と同一方向であるため、同時期のものかと考えられる。



第11図 SB02 平・断面図

③SB03（第28次調査検出SB201をSB03に改める）

第28次調査区、第29次調査区に跨る。第28次調査において南北3間、東西2間分を検出し、続く第29次調査では、南北方向の柱列をすべて検出することはできなかったが、東西方向の規模と建物の構造が明らかになった。搅乱などの影響により残りは悪いが、東西4間（約4.8m）、南北3間（約4.8m）の備柱の掘立柱建物である。柱穴掘形は平面円形で、直径0.3~0.4m、深さ0.15~0.3m、他と比べてやや柱穴掘形の規模が小さく、柱穴埋土に明確な柱痕は認められない。

柱穴からの出土遺物はいずれも小片である。須恵器杯身、縁口縁、甕口縁片が出土した。

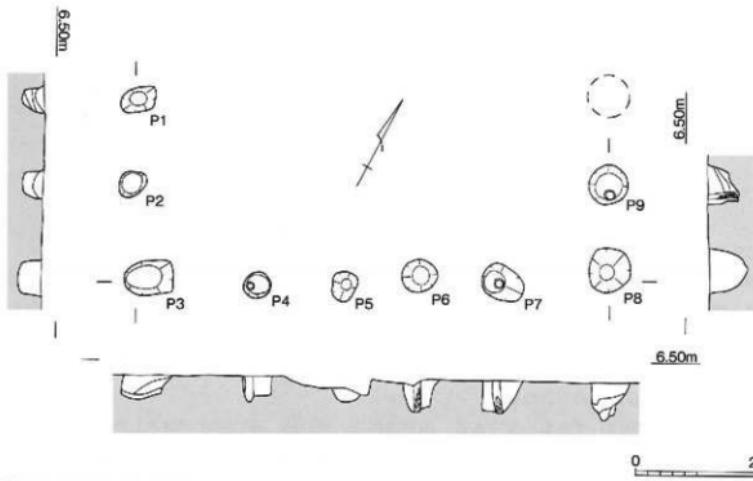
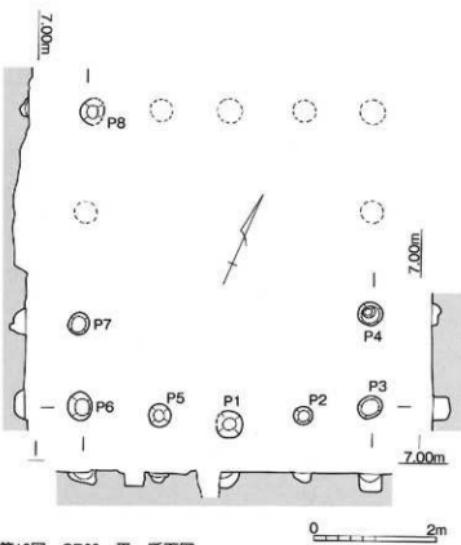
④SB04

SB03の東側で検出した建物で、東西5間（約7.6m）、南北2間（約2.9m）以上の備柱のみの掘立柱建物である。柱穴掘形は平面円形、あるいは梢円形で、径0.4~0.7m、深さは0.4~0.6mである。検出した9基の柱穴のうち、3基（P 6・7・9）から柱根が検出された。遺存する柱材の直径は0.10mである。

出土遺物は土師器の小片のみで、建物の詳細な時期は不明である。



挿図写真5 SB03検出状況
(上:第28次 下:第29次)



詳細は後述するが、遺存していた柱根の樹種同定を行った結果、柱材はいずれもコウヤマキであることが判明した。

⑤SB05

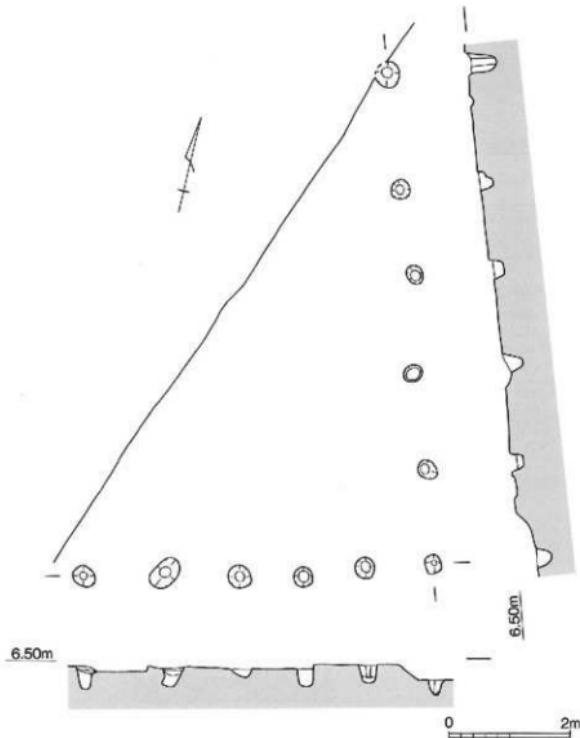
SH03と重なる位置で検出したもので、堅穴住居の埋没後に構築された掘立柱建物である。東西5間（約5.7m）以上、南北5間（約8.0m）以上の規模である。柱穴掘形の平面形は円形で、直径0.3~0.4m、深さ0.1~0.5mである。柱痕が残るものから、柱材の径は約0.1mに復元できる。柱穴から遺物は出土しておらず、詳細な時期は不明である。

⑥SB06

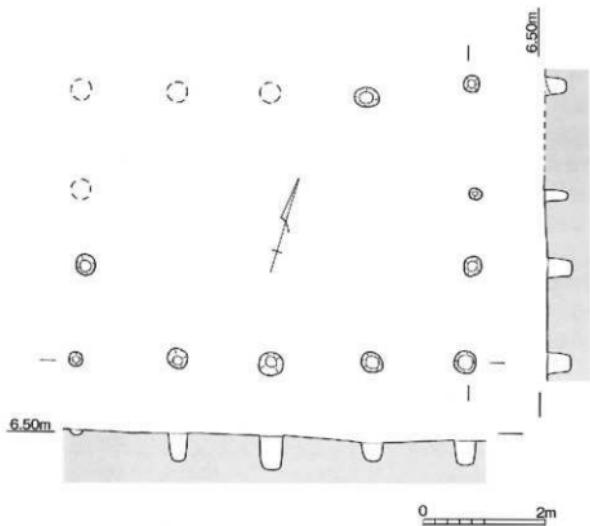
SB05の南側で検出した東西4間（約6.4m）、南北3間（約4.5m）の側柱のみの掘立柱建物である。柱穴掘形は平面円形で、直径0.2~0.4m、深さ0.1~0.5mである。明確な柱痕は認められない。柱穴からの出土遺物はなく、時期は不明である。

⑦SB07

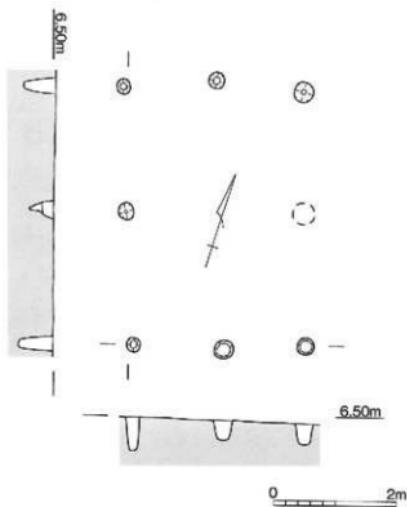
SB06と位置的に重なって検出したもので、東西2間（約2.8m）、南北2間（約4.2m）の小規模な側柱の掘立柱建物である。柱穴掘形は平面円形で、直径0.2~0.3m、深さ0.3~0.5mである。明確な柱痕は認められない。柱穴からの遺物の出土はなく、時期は不明である。



第14図 SB05 平・断面図



第15図 SB06 平・断面図

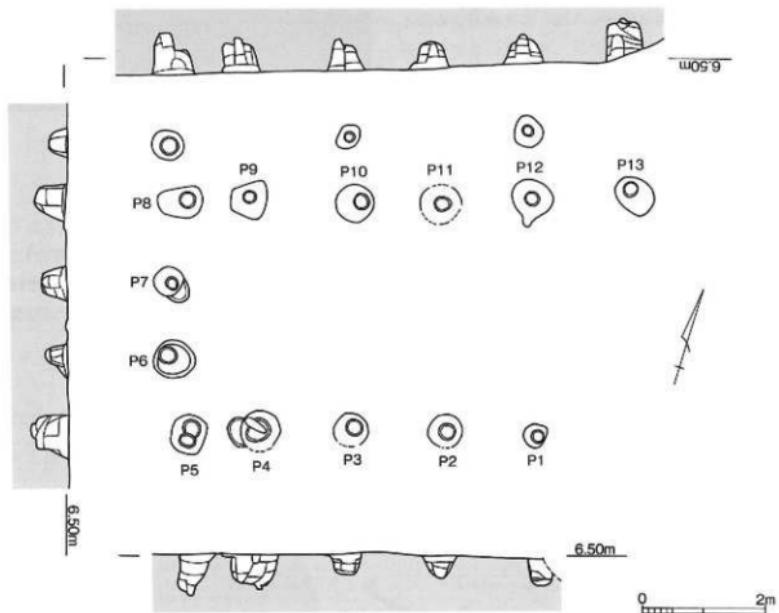


第16図 SB07 平・断面図

⑥SB08（第26次調査検出SB101をSB08に改める）

第26次調査区で検出した東西5間（約8.0m）×南北3間（約4.2m）の掘立柱建物である。柱掘形は、径0.5～0.6mの平面形が円形のものを基本とするが、四隅の柱と考えられるものは、長辺0.7mほどの平面格円形を呈し、他の柱穴より掘削深度が深い。北面の柱列の北側で2間置きに直径0.4m程度の小型の柱穴が横凸され、庇などの施設が想定される。南側にも同様の状況が想定されるが、擾乱により不明である。

柱穴掘形より須恵器の杯蓋、杯身、魁口縁、甕口縁片などが出土した。



第17図 SB08 平・断面図

(3) 土坑

土坑を3基確認した。

SK01は、SB04とSB06の間で検出した。東西1.4m、南北1.8m以上の、平面格円形を呈する土坑で、深さは約0.15mである。埋土は黒褐色シルトである。小型の土師器壺が出土した。

SX02は、SH03の床面で確認した土坑状の落ち込みである。

SH03との切り合い関係は不詳で、建物に伴う遺構の可能性もある。須恵器杯蓋が出土した。

なお、土坑の東側、SH03の壁の立ち上がり部分でSD12を検出した。土師器の壺が出土した。



拡図写真6 SK01検出状況（第29次）

(4) 溝(群)

幅約0.2m、深さ約0.1~0.25mの平行、または直交する溝を多數検出した。埋土は黒褐色粘質土で、遺物包含層に近似する。歯先の痕跡を残す箇所が散見され、耕作痕と考えられる。埋上からは、わずかに古墳時代の須恵器の出土がみられた。建物を構成する柱穴と切り合い関係があるが、その前後関係は一様でなく、建物に先行する溝、また後出する溝と様々で、耕作地の区画や形状、耕作単位などを把握するには至らなかった。



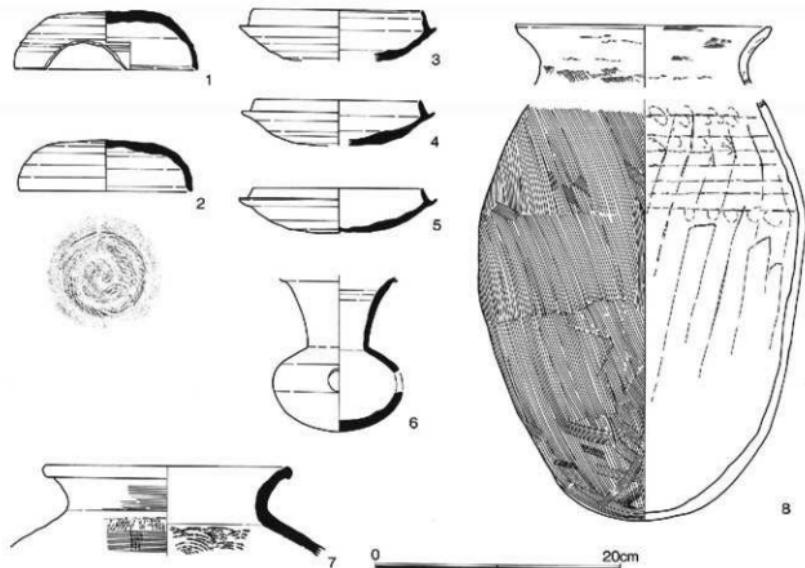
挿図写真7 溝群検出状況（第28次2区）

(5) 出土遺物

建物、土坑、溝からそれぞれ遺物が出土したが、出土量はさほど多くない。

①SH01出土遺物 1~8は堅穴住居SH01から出土した遺物である。

1・2は須恵器杯蓋である。1は口径14.8cm、器高4.8cm、体部の稜はわずかに沈線により表現される程度である。口縁端部内側は段をなし、沈線状になるが全周はしない。天井部の回転ヘラケズリ調整は1/2の範囲に及び、丁寧である。内面はナデ仕上げである。口縁の一部を幅7.0cm、高さ2.4cmで打ち欠く。2は口径14.0cm、器高4.1cm、口縁端部は丸く収める。外面の稜はほとんど認識できない。天井部のヘラケズリ調整は1/2の範囲に施されるが、幅が広く、粗雑である。天井部内面に同心円状の當て具痕がある。



第18図 SH01 出土遺物

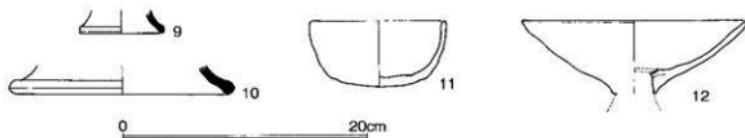
3～5は須恵器杯身である。3は口径13.8cm、残存高4.2cmで、内傾する口縁端部は鋭く、やや高さがある。受部から底部にかけてはやや丸みを残す。受部は比較的長く、ナデ仕上げで鋭角に仕上げる。底部外面1/2ほどに回転ヘラケズリ調整が施される。4は口径13.6cm、器高3.7cm、口縁端部は丸く、やや厚みがあり、鈍い。底部外面の回転ヘラケズリ調整は1/2に及ばず、幅広で粗い。5は口径13.8cm、器高3.6cm、口径に比して器高が低く、扁平な印象を与える。受部の立ち上がりは低く内傾する。

6は縫で、口縁部を失う。残存高12.6cm、やや扁平な球形の体部に幅広の頸部が付く。文様はない。体部下半はヘラケズリ調整であるが、ナデ仕上げにより痕跡が消されたものか、磨耗により調整が消えたものか明らかでない。7は口径19.6cmの壺の口縁で、くの字形に屈曲する頸部から延びた口縁端は丸く収める。体部外面は平行叩き後、ナデ消し、またはカキメを施す。内面は同心円状當て具痕をナデ調整によりすり消す。

8は床面から出土した土師器長脚形の壺で、細片化していたため口縁と頸部は完全には接合しなかった。口径20.8cm、器高約40.0cmで、底部は球形である。外面はタテ方向のハケ調整、内面、口縁端部は横方向のハケ調整、頸部から下は板状T字具やユビによるナデ上げ痕が残る。体部上半は接合痕が顕著である。

②SH02出土遺物 9～12は堅穴住居SH02から出土した遺物である。

9は須恵器の高杯脚部片で、底径6.4cmである。10は底径17.0cm、ほとんど磨耗しているが、立ち上がり部にカキキ調整を施したようである。長頸壺の脚部片と考えられる。11は土師器堵で、口径10.8cm、器高5.4cm、丸みを帯びた底部から直立して延びる体部である。底部内外面はユビオサエ、口縁端部はヨコナデ成形である。12は土師器高杯の杯部で、口径18.4cm、器壁は薄く、直線的に延びる。

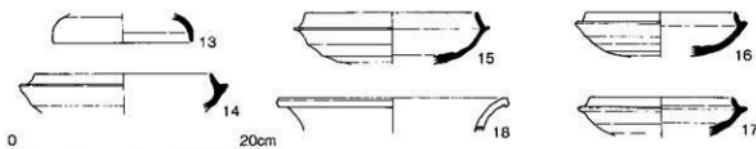


第19図 SH02 出土遺物

③SH03出土遺物 13・14は堅穴住居SH03から出土した遺物、15～18はSH03と隣接するSH02検出時に出土した遺物である。

13は口径12.2cm、壺蓋と考えられる。14は口径14.2cmの須恵器杯身片で、立ち上がりは内傾し、短い。15～18はSH02、03付近の遺物包含層、または両遺構の検出時に出土したもので、どちらに属するかは明確でない。またSB05も隣接し、これに伴う可能性もある遺物である。

15は口径13.8cmの須恵器杯身で、受部や立ち上がりは薄くシャープな作りである。16は口径12.0cm、受部がやや肥厚化し、立ち上がりも低い。17は口径11.6cm、16と同様、内傾する立ち上がりは低い。18は口径18.6cmの土師器壺の口縁で、外反する口縁端部をわずかに下側に拡張させている。

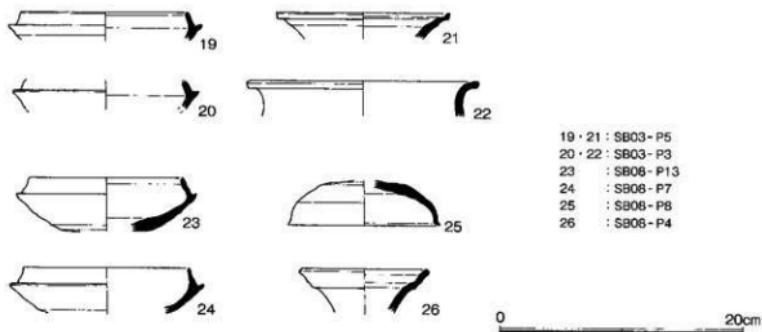


第20図 SH03及びSH02・03周辺出土遺物

④掘立柱建物出土の遺物 19~22はSB03、23~26はSB08を構成する柱穴から出土した遺物である。

19は口径13.6cmの須恵器杯身片である。20は口径12.8cm、受部にほとんど幅がなく、立ち上がりにかけては鈍角である。21は口径14.2cmの縫口縁片である。端部は上方に拡張し、回転ナデでシャープに仕上げる。22は窓の口縁で、口径19.0cm、短く外反する端部を丸く收める。わずかに残った頸部から下は、カキ目調整を施すようである。

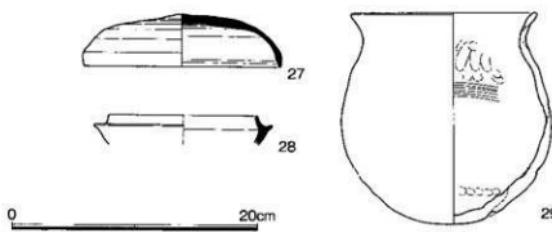
23・24は須恵器杯身で、23の口径は12.4cm、24は13.4cmである。回転ヘラケズリ調整は底部の3分の1以下の範囲である。内傾する立ち上がりはやや高さがある。25は口径12.4cmの須恵器杯蓋で、口縁端部は外側に拡張し、内面にわずかに段を有する。回転ヘラケズリは天井部の3分の1以下である。26は口径10.2cmの縫口縁片である。段をなしてラッパ状に外反する口縁部は外側に面をもつ。



第21図 掘立柱建物出土の遺物

⑤土坑・溝出土の遺物 (27~30)

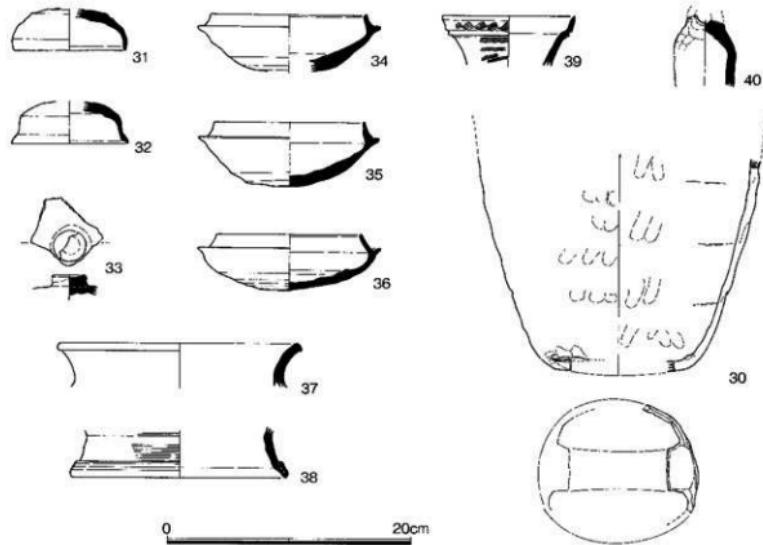
27はSX02出土の須恵器杯蓋で、口径16.0cm、器高4.3cmである。口縁端部内面に段を有し、やや内湾する。天井部、2分の1の範囲に回転ヘラケズリ調整を施す。28はSD203出土の須恵器杯身で、口径12.0cm、受部は短く、立ち上がりも低い。29はSK01出土の小型の土師器甌で、口径14.8cm、器高17.6cmである。椀状の底部に粘土紐を重ねて体部を成形するが、成形が不十分で、接合部での剥離が目立つ。内面はユビオサエの痕跡が顕著で、わずかに5本/cmのハケ調整の痕跡が確認される。30は土師器瓶である。器高は不明、底部中央を断面厚0.05cm、幅3.0cmの粘土板で2分割に仕切る。



第22図 土坑・溝出土の遺物

⑥遺物包含層出土の遺物 31～40は遺物包含層出土のものである。

31は口径9.2cm、器高3.4cmの須恵器杯蓋で、天井部回転ヘラ切り未調整である。32は口径9.6cm、口縁端部は外側に開き、内面は段をなす。器高の半分まで直立し、天井部にかけては丸みを帯びる。須恵器蓋であるが、長頸壺に作るものかと考えられる。33は天井部中央に扁平なつまみを有する杯蓋の破片である。34～36は須恵器杯身である。34は口径11.8cm、器高4.6cm、立ち上がりは内傾の度合いがきつく、やや高さがある。35は口径12.2cm、器高5.3cm、受部は短い。36は口径12.6cm、受部は肥厚化し、立ち上がりにかけての傾斜は鈍角である。37は口径19.4cmの壺口縁で、短く外反する口縁端部は丸く取れ、肥厚化はほとんどない。38は底径17.6cmの台付き長頸壺の脚部と思われる破片である。壺部は折り返しにより膨らみをもたせ、その上部には回転カキ目調整を施す。39は壺の口縁で、頸部はやや幅広である。段をなして上方に延びる口縁端部はやや尖り気味に丸く收める。段の下方の波状文は不規則で、粗雑である。40は器高10.0cmほどの瓶壺蓋である。



第23図 遺物包含層・溝出土の遺物

出土遺物のほとんどが小片であるため、口径などは復元値のものが多い。また、全容のわかるものは少ない。須恵器に関しては、おおよそ田辺編年のTK10～209型式、中村編年II-4～5期に並行する時期のものと考えられ、古墳時代後期後半、6世紀後半の年代が与えられる。

須恵器の編年観は下記による。

田辺明三『須恵器大成』角川書店 1981

『陶邑古窯址群の研究!』平安学園考古学クラブ 1966

中村 浩『和泉陶邑窯の研究—須恵器生産の基礎的考察—』柏書房 1981

3. 柱根の樹種について

古墳時代の掘立柱建物SB04の柱穴であるP6、P7、P9および併行期に単独に存在する柱穴SP29には、柱材の埋設部分が残存していた。そこで当遺跡における当時の木材利用状況を明らかにするため、これら4点の柱根について樹種同定を行なった。

同定手法は、各遺物から直接ハンドセクション法により薄片資料を探取し、プレパラートを作成して透過光での顕微鏡観察を実施した。これに際し、木材組織の構成要素を詳細に観察するために軸方向、放射方向、接線方向の3断面についての検鏡資料を作成した。

観察の結果、4点はいずれもコウヤマキ (*Sciadopitys verticillata* Sieb. et Zucc.) であることが判明した。以下に観察所見を記す。

〔軸方向断面〕(挿図写真8)

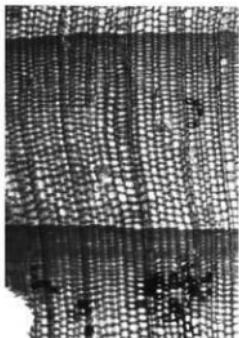
写真はSB04-P9出土の柱材サンプルである。2年輪にわたっており、画面上が樹皮方向である。早材から晩材への移行は漸移的であり、晩材の幅は狭い。また垂直樹脂道は存在しない。

〔放射方向断面〕(挿図写真9)

写真はSP29出土の柱材サンプルである。縱走する仮道管にはらせん肥厚は見られない。写真中央には5細胞高の放射組織断面が観察できる。分野壁孔はやや小ぶりな窓状で、1分野につき1つの壁孔が存在する。また放射組織の上下に放射仮道管は存在しない。

〔接線方向断面〕(挿図写真10)

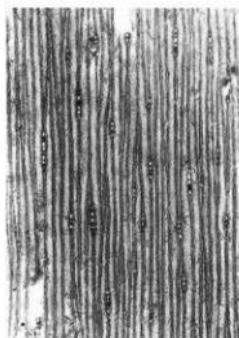
写真はSB04-P6出土の柱材サンプルである。全体に単列の放射組織が散在する様子が見て取れる。それぞれ細胞高は2~8程度である。また放射組織中に放射樹脂道は確認されなかった。



挿図写真8 コウヤマキ軸断面(50倍)



挿図写真9 コウヤマキ放射断面(200倍)



挿図写真10 コウヤマキ接線断面(50倍)

上記の観察結果は4点の資料それぞれに共通する特徴であった。これらはコウヤマキの木材組織に見られる特徴であり、各資料の樹種はコウヤマキであるとの判断に至った。

コウヤマキは一科一属一種の日本固有の針葉高木で、古来、木棺材や建築材として使用されていた状況が遺跡出土の例にも多く見られ、当遺跡の南西に位置する松野遺跡でもコウヤマキを柱材とした古墳時代後期

の建物跡が検出されている。これは、材の持つ高い耐腐朽性や耐湿性に着目した選択であると考えられ、今回の出土例も建築材、特に主柱として、物性的に妥当な選択が行なわれたことがわかる。

参考文献

- 岡本省吾1966『樹木』標準原色図鑑全集8 保育社
- 口野博史編2001『松野遺跡発掘調査報告書 第3~7次調査』 神戸市教育委員会
- 島地謙・伊東隆夫1988『日本の遺跡出土木製品総覧』 雄山閣
- 島地謙・伊東隆夫1982『図説 木材組織』 地球社



SB04-P6 柱根検出状況



SB04-P9 柱根検出状況

挿図写真11 SB04全景及び柱根検出状況

III.まとめ

1. 水笠通2丁目街区検出の古墳時代の集落について

今回の一連の調査で、古墳時代後期の竪穴住居3棟、掘立柱建物8棟のほか、柱穴、土坑、耕作に伴う溝を検出し、集落の存在が明らかになった。事業地内、第29次調査区北側の一部は、工事による遺構への影響が少ないと現状保存された。

検出した建物は、弧を描き巡る耕作痕の内側にあり、この輪郭が示す直径50mほどの範囲が居住域と推測される。この範囲には小礫混じりの砂質の強い土が堆積しており、周辺がシルト質で軟弱な地盤であるのとは対照的である。洪水により土砂が運ばれ、地盤が安定した時期に集落が形成されたと想像される。

総体的に遺物の出土量が少なく、詳細な時期の不明な遺構が多いが、いずれも古墳時代後期後半、6世紀後半の範囲に入る。中心となるのはTK43型式期と考えられる。竪穴住居SH01出土杯蓋、掘立柱建物SB08の柱穴出土の杯身がTK10型式期と、出土遺物の中でやや古相を示す。居住域の輪郭を形成する、耕作に伴う溝SD203（第28次2区）の埋土最上層からは、TK209型式期の須恵器杯身が出土している。

これらの状況から推測されるのは、SH01など竪穴住居が構築され、その後、SH01、SB01の切り合い関係にあるように、掘立柱建物に移行するものと考えられる。南に位置するSB08は、出土遺物、庇をもつ構造やその立地などから、他の掘立柱建物とは一線を画し、竪穴住居と同時期に存在した可能性がある。

竪穴住居は、廃絶されてもしばらくは痕跡を留め、塗み状となった部分に周囲から土器が混入する状況にあったと考えられる。SH01からは先の古相の遺物とともに、TK209型式期の杯身も出土しており、出土遺物のほとんどは床面から浮いた状況で出土している。

SH01の埋没後に築かれたSB01や、その北側に位置し、同じ方向軸をもつSB02からは遺物の出土がなく、明確な構築時期は不明である。建物と耕作痕との前後関係も不明な部分が多い。竪穴住居から掘立柱建物への変遷が考えられるが、すべての掘立柱建物が同時期に存在したものでないことは、同一地点に重複して建つ建物の存在や、SB08出土遺物にみられる状況から判断される。掘立柱建物の柱穴掘形の形状には、SB01・02・04のように不正円の規模の大きなものと、正円に近い規模の小さな柱穴があり、両者は建物の方向軸も若干異なる。弧状の溝の区画内でグループ化されるであろうが、少ない出土遺物ではこれらの検討は難しい。今回の調査では、まずこの地に古墳時代後期後半の限られた期間に集落が存在したという事実が判明したことを明記しておきたい。

当地域の代表的な古墳時代の集落で、今回の事業地区の西、東に立地する松野遺跡、神楽遺跡の両遺跡は、古墳時代中期末から後期前半に集落の盛行期を向かえる。その後の時期、水笠遺跡に集落が営まれた時期である古墳時代後期後半には両遺跡では、遺構、遺物の検出例が減少する。今回の発見は、当地域の古墳時代の集落動向を考える上で非常に重要な成果であったと思われる。

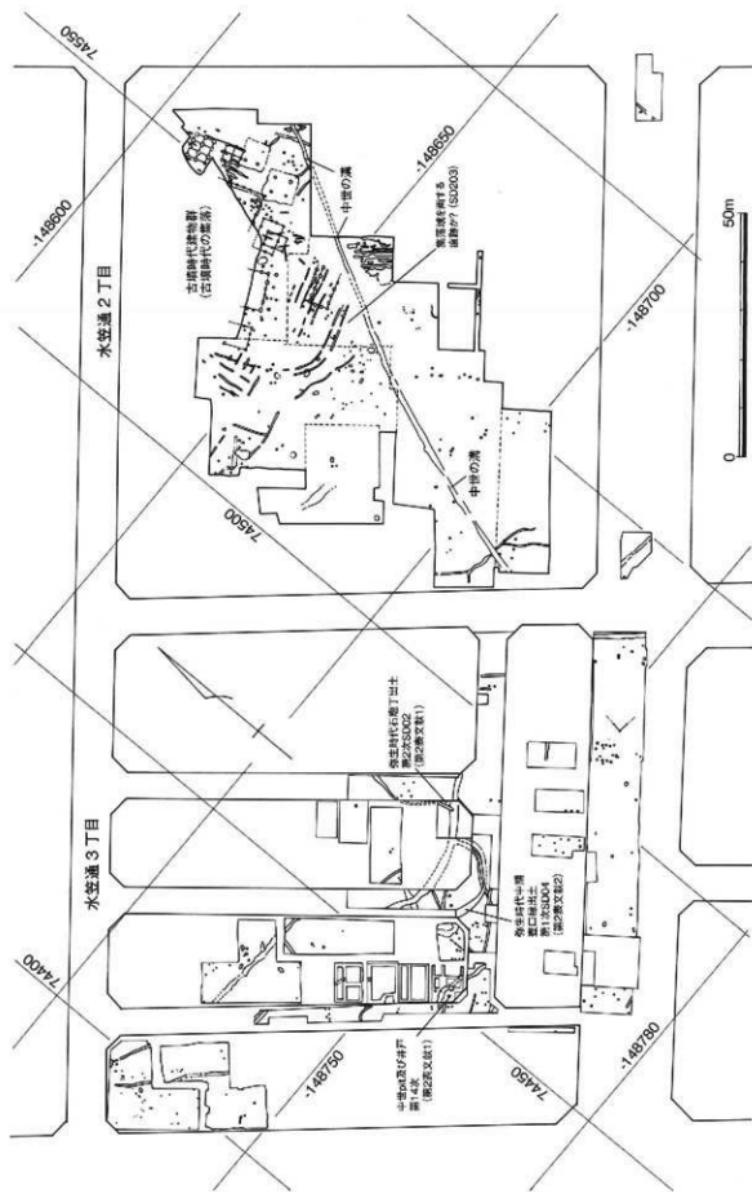
2. 水笠遺跡の様相

平成11（1999）年度に調査を開始して以降、水笠遺跡では平成19（2007）年度までに29回に及ぶ調査が実施されてきた。遺物包含層、遺構面の削平が顕著で、検出遺構、遺物の数は少ないが、これまでの調査で弥生時代、古墳時代、中世、近世～現代の各時代の遺構、遺物が発見されている。簡単に触れておく。

・弥生時代

遺構は3丁目街区の南半から2丁目街区の南西部にかけて検出される。検出遺構は溝とピットである。第1次調査検出のSD04から中期後半の壺の破片が出土しており、その他の溝も同時期の可能性が高い。第2次調査では、溝SD02から石窓丁の破片が出土した。弥生時代は一面、耕作地であったと考えられる。

また、2丁目街区での調査で、遺物包含層や遺構面形成層から石窓3点が出土している。サヌカイト片は出土していない。狩猟の場でもあったのだろう。今のところ近隣に集落の存在は想定しにくい。



第24図 水笠遺跡 全体平面図

・古墳時代

集落に伴う遺構は、2丁目街区北東部の範囲に限定される。南東隅、第28次調査4区で遺物の出土が確認されたが、量は少ない。北側に集落域が拡がる可能性が高いが、遺存状況は不明である。

・中世

第14次調査で、13世紀代に属する土師器皿を埋納した柱穴や井戸が検出されたが、この他に明確な遺構は確認されていない。北西部の第15次調査区では、旧耕土層からではあるが、平安時代中頃の縁軸陶器片や瓦片が出土した。また、2丁目街区の右上から左下の対角線上を南流する溝を1条確認している。少量の出土遺物はほとんどが古墳時代のものであるが、瓦器皿、須恵器碗の破片が出土しており、中世の遺構である。調査地での検出長は約100mで、第26次調査区での溝の規模は、幅約0.8m、深さ0.3~0.5m、南に向かい溝の深さは増す。埋土の上層には耕土層と同様の灰色砂質土が塊状に混じる。

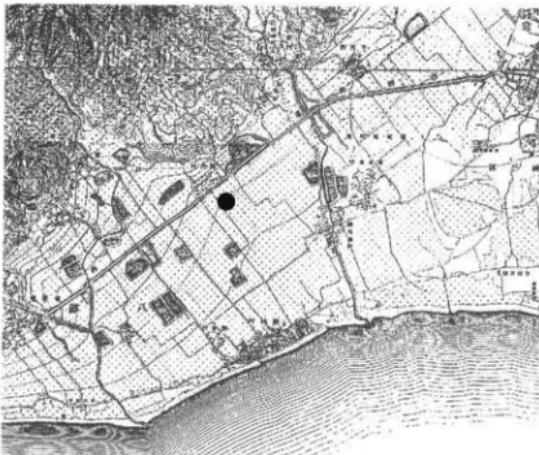
・近世以降

幕末に、2丁目街区の北寄りで間知石を礎石とする建物が築かれるが、その他の部分には耕作地が拡がる。蔵、あるいは堂宇などの建物が想像されるが、推測の域を出ない。また、前述の中世の溝の南側では同じ方向で流れる溝を検出した。近世～近代にかけての陶器や瓦が出土する。北東に位置した蓮池から、南西方向にある溜池へと流れる用水路のようなものと思われる。明治10年代の仮製地形図に描かれた等高線の形状に沿って流れる。

水笠遺跡では、古墳時代に集落が営まれた以外、基本的に付近一帯は耕作地として利用され続ける。再び居住域となるのは明治末～大正時代にかけての市街地化の際で、震災以前に見られた町割に近づいていく。

これまで、水笠遺跡においては、弥生時代、中世と考えられる遺構、遺物は検出されるものの、遺跡の内容について不明な部分が多くあった。今回の調査により、古墳時代後期の集落が発見されたことは、同時代の著名な遺跡が多い当地域の歴史を考える上で非常に意義深く、さらなる調査の進展に期待したい。

第25図 明治時代の旧地形
(明治18・19年測量)
●印が水笠遺跡の位置



写 真 図 版

写真図版 1



1. 第26次調査区西半全景(北東から)

調査区の西半部は、淡黄灰色シルトを基盤層とする遺構面で、中世以降の耕作による削平や現代の建物の基礎工事による擾乱を受けている。

遺構は西端で弥生時代と考えられる溝2条と、中世の溝1条を検出したに留まる。

この様相は西侧の街区、3丁目での調査の成果と同様である。



調査区東半部の北側には、遺構面直上に暗灰色粘質土が0.2～0.3mの厚さで堆積し、6世紀後半の遺物を良好に包含している。遺構面では畑作に伴う畦溝、据立柱建物を検出した。

南側は西半部と同様、擾乱の影響が大きく、ピット数基と溝状遺構を検出したに留まる。

2. 第26次調査区東半全景(南東から)



1. 第28次 1区全景(東から)



2. 第28次 1区西端全景(北北西から)



3. 第28次 3区全景(北東から)



4. 第28次 4区全景(西南西から)



5. 第28次 2区全景(南東から)



6. 第28次 2区東半構造検出状況(東から)

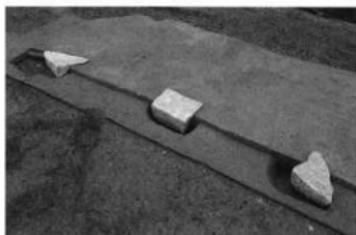
写真図版3



1. SX202全景(南東から)



4. SX203・204検出状況(南西から)



2. SX202礎石検出状況(南から)



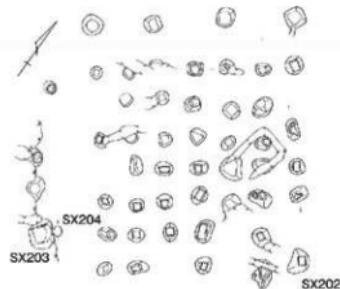
5. SX204小石出土状況(南東から)



3. 台石転用の礎石(南東から)



6. 煉瓦敷き道路側溝(2丁目街区中央・道路が曲がる部分)



第26図 SX202 平面図 0 3m

幕末～近・現代の町の様子を伝える遺構

調査地中央北寄り、第28次2区調査区で幕末～明治時代にかけての遺構を検出した。

建物SX202は、 6×6 間、約6.5m四方の規模で、間知石を礎石として据える。北辺の一石に脚部の欠損した灯籠の台石を転用する。SX202の西側では連桶SX203と甕の中に白、青、赤、黄色を意識した小石を詰めた、地鎮に伴う土坑を検出した。

調査地中央では煉瓦敷きの道路側溝を検出しており、間知石で護岸していた溝の底を煉瓦で補強したものである。震災前まで機能していたと考えられる溝である。



1. 第29次調査区全景(北東から)



2. 第29次調査区北東部全景(東から)

写真図版 5



1. SH01全景(北西から)



2. SH02全景(西から)



1. SH03全景(南から)

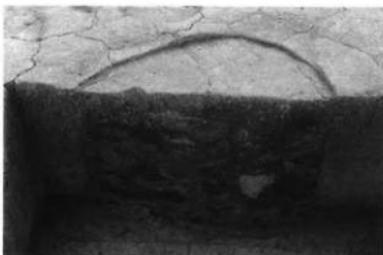


2. SB01検出状況及び作業風景(北から)

写真図版 7



1. SB02全景(西から)



2. SB02-P3断面



3. SB02-P5断面



4. SB02-P10断面

SB02全景と柱穴断面



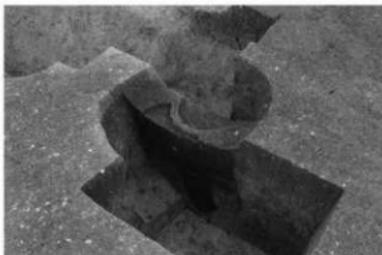
5. SB02-P12断面



1. SB08全景(北東から)



2. SB08-P2遺物出土状況(南東から)



4. SB08-P5断面



3. SB08-P2断面



5. SB08-P13断面

SB08全景と柱穴遺物出土状況及び断面

写真図版9



1



5



2



7



2



8

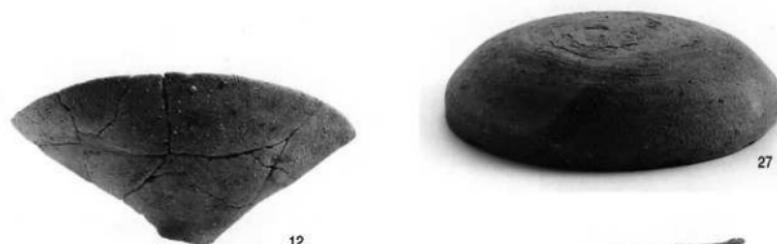
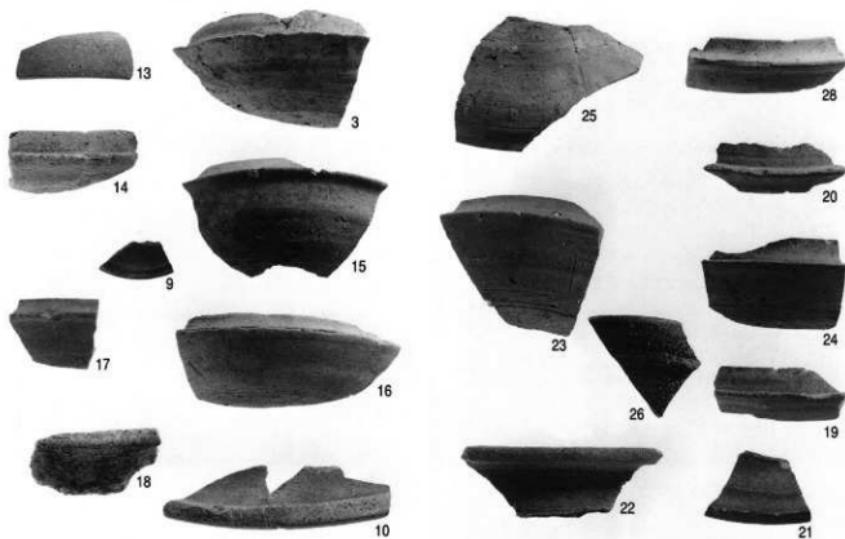


6



8

竪穴住居SH01出土遺物



SH02-03, SB03-08、土坑、溝出土の遺物

写真図版11



30



35



34



36



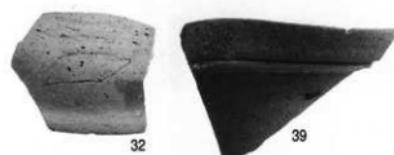
40



31



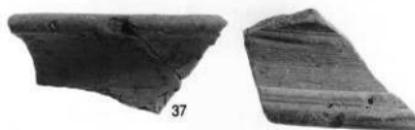
33



32



39



37



38

遺物包含層出土の石器

溝、遺物包含層出土の遺物

報告書抄録

ふりがな	みずかさいせき だい・26・27・28・29次 はくつちょうさほうこくしょ							
書名	水笠遺跡 第26・27・28・29次 発掘調査報告書							
副書名	新長田駅北地区震災復興土地区画整理事業にかかる水笠通公園築造工事に伴う発掘調査報告書							
編著者名	藤井太郎(編)・黒田恭正・山口英正・東喜代秀・中村大介							
編集機関	神戸市教育委員会・神戸市体育協会							
発行機関	神戸市教育委員会							
所在地	〒650-8570 神戸市中央区加納町6丁目5番1号							
発行年月日	西暦2009年3月31日							
所取遺跡名	所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積(m ²)	調査原因	
水笠遺跡	兵庫県神戸市 長山区水笠通 2丁目	28106	6-29	34° 39° 36°	135° 08° 36°	2003.02.1 ~2003.12.26 2005.12.14 ~2006.01.16 2006.10.17 ~2006.12.27 2007.1.03 ~2007.1.22	第26次調査 1,500m ² 第27次調査 355m ² 第28次調査 1,495m ² 第29次調査 700m ²	震災復興土地 区画整理事業 水笠通公園築造
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
水笠遺跡	集落址	弥生時代 古墳時代後期 中世 近世～現代	溝・柱穴 竪穴住居・掘立柱建物 上坑・溝(耕作痕)・柱穴 溝・柱穴 礫石建物・埋甕・焼瓦溝	弥生土器・サヌカイト (石器) 須恵器・土師器 陶磁器				
要約	これまでの調査では、弥生時代、中世の遺構・遺物が確認されていたが、新たに古墳時代後期後半に限定される集落の一部を検出した。現状で竪穴住居3棟、掘立柱建物8棟が確認された。出土遺物が少なく、詳細な時期については不明な部分が多いが、竪穴住居から掘立柱建物へと移行する様相は辿れるものと考えられる。遺跡の南西約300mの地域には、古墳時代中期末の豪族居館と考えられる建物群を検出した松野道路が隣接し、これに継続する時期の集落と考えられる。当地域の古墳時代の動向を考える上で重要な成果が得られた。							

新長田駅北地区震災復興土地区画整理事業にかかる
水笠通公園築造工事に伴う発掘調査報告書

水笠遺跡 第26・27・28・29次 発掘調査報告書

2009.3.31

発行 神戸市教育委員会文化財課
〒650-8570 神戸市中央区加納町6丁目5番1号
TEL 078-322-6480

印刷 デジタルグラフィック株式会社
神戸市中央区弁天町1-1
TEL 078-371-7000